

連載 堀口捨己の『利休の茶』を読む②

炭組と花

近藤 康子 (京都橘大学講師)



近藤 康子 (こんどう やすこ)

1985年生まれ。2008年京都大学工学部建築学科卒業。2014年同大学大学院工学研究科建築学専攻博士号(工学)取得。

2014-2016年 京都橘大学現代ビジネス学部都市環境デザイン学科助教。2016年-現在 同大学講師。主な著作に「近代建築家の茶室論にみる茶の湯の生活空間に関する研究」(博士学位論文、2014)、「建築制作論の研究」(共著、中央公論美術出版、2016)。

炭組への眼差し

堀口捨己(1895-1984)が茶室に言及する最初期の論考「建築の非都市的なものについて」(『紫烟荘圖集』所収、1927)には、かれの関心のありかが以下のとおり明示されている。

けれども自分は此(引用注:茶室の)比類のない美も其材料及特種な技巧とを離れて抽象的に考察するとき如何に現代に示唆する處多いかを思ふのである。…(中略)…かの茶室の水屋などを見るとき、最も實用的に整理工夫され、然も端然とした美しい調和と變化とを示す充分にたかめられた建築の表現は、機能と表現との一元的な完成である。(同書、pp.11-12)

堀口は茶室に、現代へと敷衍しうる価値として、「機能と表現との一元的な完成」を見出している。それは、機能性と造形上の美しさとが同時に満たされていることを意味し、かれにとっては建築において最も目指されるべき「美」のありようであった。堀口は茶室の

もつこうした特質を、水屋や道庫、釣棚上に配置された道具(図1)、皿に盛られた菓子(図2、図3)、炉に継がれた炭(図4、図5)などにも見出している。なかでも炭は、「その著しいもの」(『利休の茶』、岩波書店、1951、p.583。以下本文中[利休])と言われるように、とりわけ究極的な事例と捉えられていた。

そもそも炭は、茶の湯において不可欠なものである。なぜなら、利休百首に「茶の湯とはただ湯をわかし茶を点ててのむばかりなることと知るべし」といわれるように、また堀口自らによって「炭は湯を沸かすための元として、缺くことの出来ないもの」[利休-583]と説明されるとおり、茶の湯においては茶を点てるために湯を沸かし、そのために炉に炭を継ぐといったように、炭はまさに茶の湯の成立要因ともいえるものだからである。

堀口は炭について、「客に最もよいおこり様と、美しい組立を、見せる」[利休-515]ことが必要と記すように、火をおこすという機能性と、構成された炭全体の造形的な美しさとを、同時に満たすことが求められるとしている。また「茶の湯の中の一つの行事」として「客とともに炭を繼いで楽しむ利休の炭手前」

[利休-582-583]と説明されるように、堀口は炉の中に構成される炭を、茶人が各茶会ごとに一つ一つ心をこめて創るものと捉えていた。そのうえでかれは、こうした炭を「炭組」という独自の言葉で表現する。

堀口が「炭組」に言及するようになるのは、千利休研究を精力的に手掛けていた1940年代半ばのことである。

私は今迄茶室や茶庭を通してのみ、この茶の湯文化を見て来たのであつた。…(中略)…然し今ではこの惜しみでも残りある日本らしい文化そのものを知るには、充分でないことをこの日頃しみじみ覺え出したのである。…(中略)…殊に最近になつて珍らしい炭手前の秘傳書を見出してからなほ切にそのやうに思ふやうになつた。(『茶の湯の精神』『文藝春秋』、1945.新年號、p.6)

堀口はその頃すでに多くの茶室研究、茶の湯研究を発表していたものの、それでもな

おそれらについての理解の不足があったと述べる。その自覚の契機となったのが、「炭手前の秘傳書」に描かれた茶人たちによる「炭組」のスケッチの発見であったとされる。つまり、堀口にとって「炭組」への問いは、かれの総合的な茶室理解、茶の湯理解の根幹にまで関わるものであったといえよう。堀口がスケッチを発見する以前に、「炭組」を研究の主題としたことはない。スケッチを見出したと述べてから初めてそれを研究の主題としたものが、今回取り上げる『利休の茶』(1951)所収の論考「利休の炭」である。

論考「利休の炭」では、利休をはじめとする著名な茶人らによる「炭組」のスケッチが、史料に基づきながら説明されている。堀口はこの論考を書くにいたった契機の一つとして「炭組に表はれた造形的な含みに心引かれる處少なくない」[利休-462]と述べる。ここで言われる「含み」が「機能と表現との一元的な完成」たる事態、さらには堀口の茶室理解、茶の湯理解の根幹に関わると考えられるが、それはどのようなものであろうか。

生花との重ね合わせ

茶会においては、主人が湯を沸かすために炉に炭を継ぎ(初炭、後炭)、客が炉のまわりに集まって主人の所作(炭手前)を見るのが定式とされる。このとき炉の中に構成される「炭組」は、いわば主人による作品ともいえるものである。堀口が「炭組」のスケッチを見出したとする先述の論考「茶の湯の精神」では次のように言われる。

それ(引用注:炭)はほんの茶の湯を沸すと云ふ事のためのもので、ひと時を過ぎれば火は落ち灰に崩れ行く短い間だけ保たれる藝術であつた。これはその日の會のひと時をその季節の花で見せる床間の活花と同じやうに、忽ちうつろひて行くもので、その場に連つた四五の客だけが觀照し得るものであつた。(同書、p.7)

ここでは、「炭組」が一つの芸術作品として、床の間に飾られる生花と重ね合わされる。こ

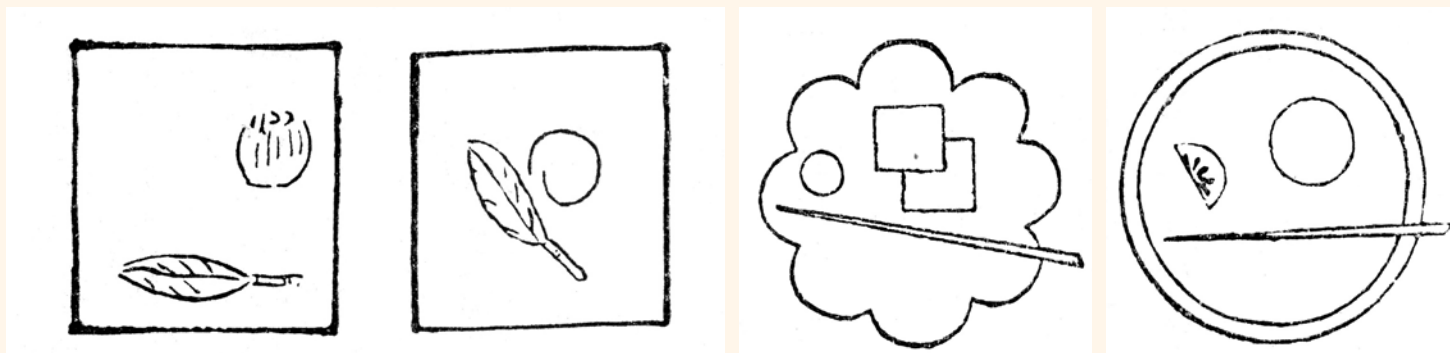


図1 利休的樹飾
[利休-570]より転載。
堀口はこれらについて、「極めて細かい心が用ひられて」[利休-570]いと述べる。『利休大辞典』(淡交社、1989)所収の「南坊宛て伝書」(今日庵文庫蔵)の図版とは少し異なるようである。

図2 利休の菓子盛合せ圖
[利休-584]より転載。
堀口によれば、「菓子の盛り方」の美しさには、「庭の石組」や「盆石の石」などにも通うものがあるとされる[利休-583]。

図3 利休の菓子盛合せ圖
[利休-584]より転載。
『古今茶道全書』(1694)所収の図版より、やや傾けられているようである。



図4 利休の口切の時の炭
[利休-459]より転載。堀口は、「炭組」のなかでも特に点炭に着目している。「点炭は全く炭組の仕上げ動所を誤らず、總ての纏りの根の如く打ちこまれてゐた」[利休-523]「利休の炭は二つとも、點炭によつて、總てを引きしめてあるので、點炭をはじめから使ふ心積りであつたらうし、點炭に初めからその重い役を荷はせて、組んだ如くであつた」[利休-523-524]

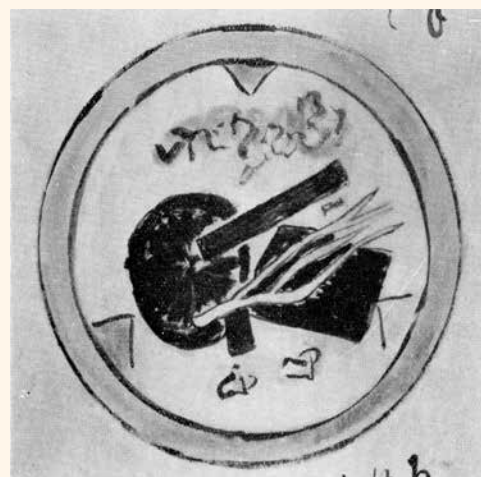


図5 利休の右勝手炭
[利休-559]より転載。

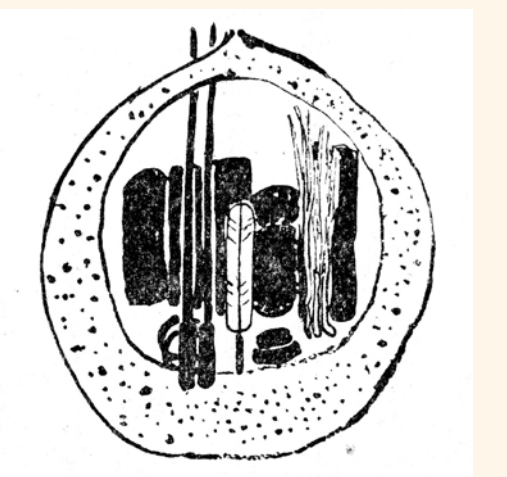


図6 炭取の炭組
[利休-559]より転載。
論考では、図版と合わせて「炭は置くより、組むこと難しとなり」(茶道書問録)という言が引用される。

「茶の湯の心」の冒頭にも見られることから、堀口の思索におけるその重要性を窺い知ることができる。引用をみよう。「炭組」は、火がつき、燃え、灰になってゆくものであり、他方の生花は、蕾が開き、咲いて、また萎んでゆくものであることが示唆される。両者はともに、時々刻々と姿形をかえて「忽ちにうつろひて行く」ものとして、ある限られた時間、場所においてしか成立しえない一回的なものといえる。換言すれば、堀口はこれらの二者を、静的なものではなく、連続的な時間を伴う動的事態と捉えていた。

しかし、このように重ね合わされる二者ではあるが、堀口は生花と「炭組」とを、「色麗しい」と「色黒い見栄えしない」ものとして「物の両端に對ひ立つ」[利休-461]とも位置づけるように、決定的な違いも見出している。なぜなら、生花においては色麗しさや新鮮さなどの造形上の美が特に追求されるのに対して、「炭組」においては、先述の通り「湯を沸すための元」として、造形上の美だけではなく、機能性も求められるからである。つまり、堀口が「炭組」を語る際に、あえて生花と合わせて記述したのは、「炭組」が一回的な動的事態であることと、見栄えばかりではなく機能性が求められるものであることをふまえてのことと思われる。

しかし、このように重ね合わされる二者ではあるが、堀口は生花と「炭組」とを、「色麗しい」と「色黒い見栄えしない」ものとして「物の両端に對ひ立つ」[利休-461]とも位置づけるように、決定的な違いも見出している。なぜなら、生花においては色麗しさや新鮮さなどの造形上の美が特に追求されるのに対して、「炭組」においては、先述の通り「湯を沸すための元」として、造形上の美だけではなく、機能性も求められるからである。つまり、堀口が「炭組」を語る際に、あえて生花と合わせて記述したのは、「炭組」が一回的な動的事態であることと、見栄えばかりではなく機能性が求められるものであることをふまえてのことと思われる。

炭組と花

論考「利休の炭」では、利休の「炭組」に関する史料が参照され、それについての堀口独自の解釈が示される。そこには、どのような「機能と表現との一元的な完成」が記されているのか。まずは「炭組」の機能性について言及されたと思われる箇所を引用する。

利休は炭組をそのやうに、火相と離れて見ることを、「南方録」によると、口を極

めて強く掛けてゐたと云ふ。湯を沸かすと云ふ元からの目當を離れて、その美しさになづむことは、云ふまでもなく排けられる可きであつた。[利休-584]

「炭組」においては、「美しさになづむ」という造形上の美のみを目指す態度が退けられ、また「湯を沸かす」という機能性の問題が「元からの目當」と言われる。つまり、堀口は造形上の美と機能性とを並列的に捉えるのではなく、機能性を根元的な問題と捉えていることがわかる。かれは、利休が茶会のなかで釜の湯を新しい水とかえようと釜をもって席を外したときに、そこにいた客が炭を新たに継ぎ足したという逸話（『南方録』）を参照し、冷たい水に備えて火を強めようとした客の動きを「當に茶の湯の命そのもの」[利休-533]と評するほどに、「炭組」における機能性を重要視していた。

では、上述の引用で言われる「火相」とは何か。別箇所では、『南方録』における「炭ノ次第ヨリ、初テ一座一會ノ心、只此火相湯相ノミ也」という言が参照され、「火相湯相」という言葉の意味が、「火と湯との當に在る可き相」と解釈されている[利休-532-533]。つまり、堀口は「火相」を、湯の温度に適した火のありようと理解していると解される。そして、茶の湯においてはその火をおこすために炭を継ぐのであるから、「炭組」は湯を沸かすという機能を担っており、「火相」と言われるのは、この機能性の実現された様を意味していると考えられる。引用は次のように続く。

然し炭は、火移り、興り明るみ、そして灰にすがれ行くのであるが、その時々動きの相を見ることはない。それは興り明るむ前に表はれる相の美しさに、盡きていた。[利休-584]

先述の引用では「火相」を離れて見た目の美しさを重視することが否定されていたにも関わらず、この引用では「火移り、興り明るみ、そして灰にすがれ行く」といった「火相」の機能の実現の様を、実際に人々が目のあたりにすることはないと言われる。これはどういうことか。文の後半に着目しよう。「興り明るむ」とは、機能の実現の様相を意味していると考えられる。この機能の実現よりも前に「表はれる相」とはなにを意味するのか。機能性を離れたの美しさの希求が否定されていながら、ここで「美しさに、盡きていた」と言われることを考え合わせると、「表はれる相」とは、目の前にある「炭組」を通して看取される機能実現の予見性と考えられる。つまり予見されることが重要なのであって、実際に「火相」そのものを見ることは問題ではないのである。そして、このような「火相」の予見されることこそが、「美しさ」という語を伴って表現されていると考えられよう。

そこにたゞ見る可き物でない火相が、炭の花となつて、また更に見られ可きものとして、浮き上つて來てゐるのである。利休は南坊宗啓などのやうに、ひたむきに一面の傾を押し通さないで、たゞ目の楽しみとしてのみ見られる惧れはあつたにもせよ、炭の花を、花として、火の相の中に咲かせることを、遂に忘れなかつたのである。[利休-535]

先述の予見されるものとしての「火相」が、ここでは「炭の花」という特殊な言葉で語られる。この言葉は、利休が述べたとされる伝書（木村常陸介宛）から引用されている。堀口はこの「花」について、世阿弥の『風姿花伝』や『至花道』においていわれる花という語の意味と重なると推測し、「炭の花」を「當分の作意によつて、組み立てられた炭繼ぎの美

しい見所」[利休-535]と解釈する。「當分の作意」とは、異文で言われる「一座一會の心、即ちその時の茶の湯の心ばえの仕遂げ」[利休-533]と同義であろう。すなわち堀口は、「花」を、茶人の好みや趣向、時節などによって随時変化する一度限りのものと捉えているのである。引用において「見られ可き」「浮き上つて」と言われるように、「花」は見る者の目を捉え、見る者に向かって現れてくとされる。また堀口によれば、利休は「炭組」の見た目の面白さから、造形そのものが注目されることを懸念しながらもなお「花として」、火の相の「中に」咲かせるといわれる。すなわち、堀口が見出した「炭組」においては、見る者に予見された機能の実現の様が、そこでしか成立しえぬものとして、自ずから立ち現れてくるのである。堀口はそのような「炭組」の資質を、「花」という語によって言い表していたと考えられる。またこの「花」こそが「機能と表現との一元的な完成」たる「美」を指すのだろう。先に堀口が「炭組」を動的事態と捉えていると述べたが、そこにはこのような「花」が看取されていたのである。



図7 石州流風爐の炭型 [利休-525]より転載。堀口は、上記図版のような「炭組」を、利休の初炭に近い姿ではないかと推測する [利休-525]。

自然の構成

それでは、「花」を成立させうる「炭組」はどのような構成をもつのだろうか。次の言は、利休の「炭組」に関する史料（『炭飭書』）の一節を、堀口が解釈したものである。

（前略）利休は炭燒竈の中に、積み込まれた木の様を見て、爐の中も同じやうに思ひ見て、考へ付いたものとしてゐたのである。炭組の中の最も太い大きな付きの胴炭は、木の幹と考へ、輪炭や相炭を、切りかぶと見、管炭や點炭は、枝とし、白炭は花と穂に、なぞらへてゐた。[利休-526]

胴炭、輪炭、相炭、管炭、点炭、白炭を、それぞれ幹、切株、枝、花と穂になぞらえたと言われるように、利休は炉の中の「炭組」の構成要素を、炭焼竈の中の木の諸要素に重ね合わせたとされる。

この重ね合せはさらに次のように読み解かれる。

これらは竈の中の自らの組立と、組合を見て、その中から美しさを作る術としての組立の宜しさと、組合せの面白さを、抽き取つて、炭竈に比べては、極めて狭い爐の中に、新しく更に表はし出したものである。[利休-526]

「自らの」に対して「作る」「抽き取つて」「表はし出した」と言われるように、堀口は竈の中にある木の様と炉の中にある「炭組」とを、自然と作為として対比づけている。注目すべきは、「炭組」についての記述に「新しく」「更に」という修飾語が加えられることである。これは、「炭組」という作為が、自然の構成のある種の再現と捉えられていることを意味

している。堀口は「利休が、はたしてかく述べたか否かは別として、彼の組み立てられた炭の形からは、このやうな話を、思ひ付けせるものがあつた」[利休-526]と述べるように、利休の意図の有無に関わらず、「炭組」における再現性ということ、堀口自身の思索のなかで重視していた。そして再現の対象とされる「組立」「組合」については、「互に組み合はされたものが、縁を切らすなどある如く、各>深く結び付き合ひ、一つの組み立てに纏められ、然もそれらが各>釣合ひとれたものでなければならぬ」[利休-527]と説明されるように、堀口は、無作為に積み込まれた木のありようが再現された「炭組」に、自然な行為や物がつもつある有機性、全体性という構成原理を見出していると考えられる。さらに、このような構成原理から「美しさを作る術」を引き出しているとされることに着目しよう。すなわち、この構成原理によって纏められてこそ、予見されるべき可能性をもつ「炭組」が実現されうると捉えられていたと考えられる。また、「炭組」における木の構成のなぞらえは一事例ではあるものの、自然がつも有機性、全体性の再現ということにおいては確固たる構成の事例として、堀口は捉えていたといえよう。

以上のように、堀口は「炭組」のスケッチを通して、目の前にある姿とは別に、将来おこであろう機能実現の様や、自然のもつ有機的かつ全体的な構成を看取していたと考えられる。初めに堀口が「炭組」に造形的な「含み」を見ていることを示したが、そこにはこうした予見性や再現性が見出されていたといえるだろう。（続く）